慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドイツ語の「願望文」
Sub Title	Optativsätze im Deutschen
Author	中山, 豊(Nakayama, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.54 (2017.) ,p.35- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20170331-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドイツ語の「願望文」

中　山　　豊

1. ドイツ語の文タイプ（Satztyp，Satzart，Satzmodus）については，Flämig（1964）を嚆矢として活発な研究がなされてきた。また近年Meibauer/Steinbach/Altmann（2013）やFinkbeiner/Meibauer（2016）などの浩瀚な論集が相次いで出版されるなど現在非常に関心が高い研究分野となっている。

ドイツ語では文タイプとしては平叙文(Deklarativsatz，Aussagesatz)，疑問文(Interrogativsatz，Fragesatz)，命令文(Imperativsatz，Aufforderungssatz)の主要タイプおよびその変種に，感嘆文(Exklamativsatz, Ausrufesatz)と願望文(Optativsatz, Wunschsatz)の副次的なタイプを加えたものを立てるのが一般的である。

本稿では，まず文タイプをAltmann（1993）にしたがって，形式的特徴と構造的意味の対としてとらえ，漫画『はだしのゲン』と『アドルフに告ぐ』のドイツ語版を主たる資料としてそこに出現した願望文の構造的意味とそれを支える文法的諸特徴の相互作用を明らかにしていきたい。

2. 文タイプ研究の基礎文献の1つであるAltmann（1993:1007）は文タイプを機能面と形式面が組み合った複合的な言語記号としてとらえている。機能面とは語彙的な要素や文脈には依存していない純粋に構造的な意味を

指す。以下の例文（1a）から（1e）までを比較してみよう[1)]：

（1） a. Du hast Mut(↓). (Deklarativ: S(precher) glaubt, daß etwas der Fall ist)
b. Hast du Mut(↑)? (Interrogativ: S will wissen, ob etwas der Fall ist)
c. Hab (du) Mut(↓)! (Imperativ: S will erreichen, daß etwas der Fall sein wird)
d. Hast du Mut(↓)! (Exklamativ: S ist erstaunt, wie sehr etwas der Fall ist)
e. Hättest du (doch) Mut(↓)! (Optativ: S wünscht, daß etwas der Fall sei)

上の各例文では含まれる語彙要素はほぼ同一であるが，定形の位置，定形の法，音調，心態詞などの文法的特徴によって支えられる話者の命題態度はそれぞれまったく異なっている。この命題態度が文タイプの構造的意味である。

文タイプは言語行為論的意味での行為タイプとは区別しておかなければならない。1つの文タイプは様々な行為タイプとして機能し，逆に1つの行為タイプは様々な文タイプによって表されるからである。例えば命令文は以下のように，その命題内容や使用文脈に応じて，さまざまな行為タイプとして機能することができる：

（2） a. Geh zum Teufel! （罵倒）
b. Bleib gesund! （祈願）
c. Mach bitte die Türe zu! （頼み）

1）以下文末の（↑）は上昇調，（↓）は下降調，（→）は継続調の音調を表す。また命題態度の記述は Finkbeiner（2015:73）に従った。

d. Darf ich gehen? − Geh nur! （許可）
（Altmann 1993:1008）

また「相手に大きな声で話すよう促す」発話行為は以下のような様々な文タイプを用いて遂行することができる：

（3） a. Sprechen Sie bitte lauter! （命令文）
b. Könnten Sie mal lauter sprechen? （疑問文）
c. Sie sprechen zu leise. （平叙文）
d. Ach, würden Sie doch lauter sprechen! （願望文）
e. Sprechen Sie (aber) leise! （感嘆文）
（Altmann/Hahnemann 1999: 146）

文タイプとしての願望文が表す「願望」は命題内容に対する話者の心的態度を表す構造的意味であり，これに対して（5）–（8）の文が表す「願望」の意味は *wollen*，*wünschen*，*gern*，*hoffentlich* などの語彙的意味に依存していて，これらの文の文タイプはいずれも平叙文である：

（4） Ich wollte, ich wär auch so gut zu meiner Mutter gewesen! Aber nun ist sie tot. (D1. 200)
（5） Ich wünschte, ich wäre auch so gut zu meiner Mutter gewesen, als sie noch lebte. (D2.I, 210)
（6） Ich will, dass Tomoko gesund wird! (D2.IV, 254)
（7） Ich würde so gern eine Salzpflaume essen... (D2.III, 69)
（8） Hoffentlich sagt er uns, dass wir mehr zu essen kriegen (D2.III, 191)

wünschen（あるいは *wollen*）の接続法Ⅱ式＋定形２位の副文は出現頻度

の高い構文ではあるが，それらは例文（9）のように，別の文タイプ（ここでは *w*- 定形後置感嘆文）に転換できるところからも願望文でないことが明らかである：

（9） Wie ich wünschte, dein Traum wäre Wirklichkeit...!
(D2. II, 21)

3. 本節では，本稿の主題である願望文の命題態度はどのようなものであるかを検討してみよう。願望文の命題態度には，話し手が命題で表される事態を実現可能とみなす可能法（Potentialis）と実現を不可能と見なす非現実法（Irrealis）とがある。（10）の各文のように出来事時（Ereigniszeit）が発話時（Sprechzeit）よりも先行する時制，すなわち接続法Ⅱ式過去（Konjunktiv Präteritumperfekt）では，話者の願望は通常実現不可能である。例えば（10b）のように爆弾が投下された後ではその事態を覆すことは不可能である：

（10） a. Hätte ich mich doch nie freiwillig gemeldet! (D2.I, 249)
b. Wenn nur die Bombe nicht gewesen wäre! (D2.III,217)
c. Wenn er doch wenigstens sein Bild hätte beenden können...
(D2.III, 165)

また時制が例文（11a）や（11b）のように接続法Ⅱ式現在（Konjunktiv Präteritum），あるいは例文（11c）のように接続法Ⅱ式未来（*würde*-Form）で *sein*，*haben*，*studieren* などの状態述語を含む文では，発話時が出来事時と一致していて，やはり願望の実現は不可能である。（11b）の話者の失われた片足はもはや取り戻すことはできない：

（11） a. Wenn nur alle Japaner so wären! (D1, 84)
b. Ach, wenn ich nur mein Bein noch hätte! (D1, 229)
c. Ach...Wenn Isao wenigstens vernünftig an der Uni studieren würde... (Afolf I,16)

これに対して出来事時が発話時の後にくる場合，すなわち以下のように時制が接続法Ⅱ式現在でも述語が *werden* や *reifen* のように状態変化を表す場合には，願望の実現の可能性は残される。物語では（12a）の話者であるゲンの父親の願いは死後ではあるがかなうことになる。また（12b）の願いは収穫時期なれば麦が実ることは順調にいけば十分期待できる事態である（現実にはいやがらせによって畑は踏み荒らされてしまうが）：

（12） a. Veflucht, wenn doch nur Frieden würde... (D1, 18a)
b. Wenn doch nur der Weizen in dem Stück Land reifte, das wir uns geliehen haben! (D1, 18b)

同様に未来を表す副詞や付加語などによって出来事時が発話時の後にあることが明示される場合も願望の実現が見込める。（13a）ではまもなく夜が明けるのは確実に予期できる事態であり，（13b）では漫画の絵や日本語から話者である司令官が笑みをうかべるほどに希望の実現を期待していることが読み取れる：

（13） a. Wenn doch nur bald Morgen wäre! (D2.I, 30)
b. Ach, würden doch die nächsten Schwadronen mal etwas mehr zulegen. (D1, 153)
つぎの特攻隊でどれだけ勝率があがるかたのしみじゃフフフ (J.I, 153)

願望文の定形の法は原則として接続法Ⅱ式であるが，出来事時が未来の場合には直説法も可能である。本稿で調査対象とした資料には直説法の例は現れなかったが，Zifonun et al（1997: 668）には（14a）が例として挙げられている。定形の法の違いは話者の期待値の違いを表す。定形が直説法の（14a）は，接続法Ⅱ式の（14b）よりも話者の願望実現の期待値は高い：

（14） a. Wenn er bloß morgen nicht zu spät kommt.
b. Wenn er bloß morgen nicht zu spät käme.

ただし，定形の法が直説法の願望文には否定表現の存在が必要であるという制約があり，この制約に反しない（14b）や以下の（15）は独立した文タイプとして容認できるのだが，制約に反する（16）は，条件文の中の帰結節が省略されて後に残った前提節と解釈される場合にのみ容認可能であり，自立した文としては非文法的な文となる（Zifonun et al 1997: 669）：

（15） Wenn sie sich nur nicht übernimmt!
（16） Wenn sie nur um 5 Uhr da ist(, bin ich froh/zufrieden).

4. 標準的な願望文には定形後置文（VL）と定形1位文（V1）の2変種があるが[2)]，両者に共通する主な形式的特徴としては，*w*- 疑問詞を含まないこと，定形が接続法Ⅱ式であること，下降調で終わること，そして特定の心態詞がほぼ義務的であることが挙げられる。本節では願望文に生起する心態詞を含む不変化詞について考察する。

2）他に *daß*- 定形後置願望文と不定詞主文構造の願望文があるが，後者については第6節で触れることにする。

4. 1. 願望文に現れる不変化詞は（17）の例のように *doch*, *nur*, *bloß*, *wenigstens* のいずれかであり，それらが（18）のように同一文中に複数生起する場合もある。その場合 *doch* は常に他の不変化詞に先行する[3)]：

（17） Wenn es doch / nur / bloß / wenigstens wärmer wäre!
(Grosz 2013: 157)

（18） a. Ach, wenn es doch nur bloß wenigstens wärmer wäre!
(Grosz 2013: 157)

b. Verflucht, wenn doch nur Frieden würde... (D1, 18a)

c. Wenn er doch wenigstens sein Bild hätte beenden können...
(D2.III, 165)

d. Wäre ich doch bloß zur ausgemachten Zeit da gewesen!
(Adolf I, 20)

4. 2. 願望文での不変化詞の生起は義務的とされているが（Obligatoritäts-Hyphothese），不変化詞の欠如を補う方策が講じられていればその文は容認可能となる。そのような方策としては（19）のように定形 1 位願望文では定形に強勢を置く，あるいは（20）のように間投詞などを文頭に置くことなどが指摘されている（Grosz 2013: 151）：

（19） WÄRE ich berühmt!

（20） Ach, wenn es wärmer wäre!

（20）の *ach* のように文頭に立ち話者の命題態度の解釈の補助になる先行要素として願望文に生起するものには，他に *o(h)*, *(mein) Gott*, *verflucht*

3）*doch* を心態詞，残りの 3 者（とりわけ *wenigstens*）を焦点化詞とみなせば，心態詞は焦点化詞に先行する，と定式化できる。Grosz （2013:163）は *doch* を唯一の典型的な願望文心態詞であると評している。

などがある[4)]。

不変化詞を欠いているのに，それを補う形式を備えていない文は，（21）のように帰結部が文脈から再構できる省略文である可能性が高い。あるいは（22a）のように別の文タイプであるか，あるいは（b）のような非文である：

（21） Wenn ich gewusst hätte, dass sie uns nur den ganzen Tag prügeln [, hätte ich mich nie freiwillig gemeldet]!
(D2.I, 220)

（22） a. Würdest du das Radio abstellen (↑)? （定形1位疑問文）
b.*Würdest du das Radio abstellen (↓). （Scholz1991:123に依る）

4. 3. *wenigstens* は焦点化詞の尺度評価機能を保っていて，文法的形式素とみなすにはあまりにも語彙的な意味が強い不変化詞であり，命題内容によっては（23b）のように願望文には生起できないことがある。（23b）を容認可能な文にするためには，（24）のような尺度において上位に位置するとみなされる述語（ここでは *reich* に対する *berühmt* や *allmächtig*）を含む文脈を補うことが必要となる（Grosz 2013: 163）：

（23） Wäre ich (a) nur / (b) *wenigstens reich!

（24） Ach, wäre ich berühmt und allmächtig! Oder...Wäre ich wenigstens reich!

4）このような先行要素を Scholz（1991: 110）は Interjektionspartikel, Auer（2016: 74）は Vorläuferelement と名付けている。*ach* は願望文の先行要素として最も出現頻度が高い間投詞であるが，*Ach, da bist du ja!*（Grosz 2013: 159）のように，別の文タイプにも現れるので，この存在だけで願望文であることが保証されるわけではない。

4.4. 不変化詞の出現頻度に関して，本稿が依拠している漫画資料に基づいて表にしたのが（25）である[5)]。この表で目をひくのは一般にプロトタイプ的な願望文の心態詞とされる *doch* が，Scholz のデータの定形 1 位願望文でこそ 50% と出現頻度が最も高いものの，定形後置文や漫画資料における *nur* や結合形の *doch nur* ほどは用いられていないことである。ちなみに英語の *if only*- 祈願文では「(i) only の生起が義務的であり，また（ii）許される限定副詞が only に限られ，しかも（iii）only の生起可能な位置が限定されている」（前田 2015: 114）ほど構文化が進んでいる。ドイツ語は *nur* の使用頻度が高いとは言え，定形の位置が 2 種類あることとあわせて，不変化詞に関しても英語ほど安定した願望文が成立していない段階にある。

（25）

不変化詞	VL 願望文（23 例）	V1 願望文（8 例）	願望文全体（31 例）
nur	43%（38%）	50%（26%）	45%
doch nur	26%（17%）	0 （11%）	19%
doch	9%（27%）	25%（50%）	12%
wenigstens	17% （8%）	0 （3%）	12%
bloß	4%（11%）	13%（6%）	3%
doch wenigstens	4% （0 ）	0 （0 ）	3%
doch bloß	4% （1%）	13%（4%）	3%

5. （25）の表から，全体として 31 例ある願望文のうち *wenn*- 定形後置願望文が 23 例すなわち約 75%を占め，圧倒的な割合で出現度が高いことがわかる。定形後置文は一般に周辺的存在ではあるが，以下のようにどの文タイプとしても機能するという点で特異である：

5）（ ）内の % 数値は Scholz（1991: 118ff.）のものを表す。

（26） Wo ich doch schon am Montag losfahren wollte. （平叙文）

（27） a. Ob er (wohl) noch kommt? （疑問文）

b. Wer das (nur / bloß / wohl) eingekauft hat?

（28） Daß du (JA) rechtzeitig heimkommst! （命令文）

（29） a. Daß der aber SO hübsch ist! （感嘆文）

b. Wie es hier aber auch KALT ist!

（30） Oh, wenn ich doch ein Königssohn wär! （願望文）

定形後置文は従属接続詞（あるいはその機能をもつ疑問詞）によって導入されるが，競合する文タイプが多数あっても，それらは *wenn* で導入されることはないので，願望文と混同される恐れはない。Altmann（1993: 1025f.）はこのことが理由となって定形後置願望文が願望文として最も用いられるのではないかと推測している，

6. 願望文は独立した文なのか，あるいは条件文が省略されて残った前提節に過ぎないのではないのか，という問題単一文を対象にして文文法的に議論されることが多かった。しかし，テキスト文法的視点からみると，文の自立性はそれを談話構造の中に置いてみて初めて決まる，ということが言える。例えば（31a），（31b）の両文は単独で見ればいずれも自立した平叙文であるが，両者を並べた（31c）の文脈の中では（31b）は（31a）の理由を説明する文という意味で内容的には従属文に相当している（Reich/Reis 2013: 562）：

（31） a. Hans ist aufgewacht.

b. Der Wecker hat geklingelt.

c. Hans ist aufgewacht. Der Wecker hat geklingelt.

この現象と同様に，願望文も後続する文に対して前提節としてふるまうことがある：

（32） Ach, wenn ich nur mein Bein noch hätte. Ich würde wie verückt arbeiten und könnte alle Schulden bezahlen. (D1, 229)

（33） Wenn ich nur mein Bein noch hätte! Dann würde ich das Geld schon aufbringen! (D2.I, 239)

（34） Wenn ich nur nicht immer hinter dir aufräumen müßte, dann wäre mir schon einiges geholfen. (Scholz 1991: 142)

上の各例において２つの文の結束性の強さは異なっている。（32）では両文がただ並置されているだけでゆるい関係であるが，（33）では接続副詞 *dann* により両文が前提―帰結の関係にあることが明示されている。さらに（34）では文の境界はピリオドの代わりコンマで区切られ，両文の緊密度はさらに増している。ここで不変化詞の *nur* がなくなれば非現実話法の条件文と何ら変らないものになる。

願望文の後に定形が直説法の文が続く場合には，願望文はその持つ意味論的含意を経て理由を表す従属節として機能することがある。（35a）は現実の事態を表す（35b）を含意し，この含意が後続の文の理由を表す従属節として働くのである。理由節を副文として後続文を主文としてまとめた複合文は非現実話法の（35d）とほぼ同義となる：

（35） a. Wenn wir wenigstens gewonnen hätten! Nun wird dein Geist nie Ruhe finden! (D2.IV, 46)

(⇒ b. Wir haben nicht gewonnen.)

c. Da wir nicht gewonnen haben, wird dein Geist nie Ruhe finden.

(⇔ d. Wenn wir gewonnen hätten, würde dein Geist Ruhe finden.)

7. 最後に出現頻度は低いが最近注目を集めている，不定詞主文構造（infinite Hauptsatzstruktur = IHS）をもつ願望文に触れておこう。IHS は定形をもたない文等価な（satzwertig）な構文であり，その中でも 1 格補足語と疑問詞を含まない原形不定詞句 としての IHS には以下のようなさまざまな用法があるとされている（Gärtner 2114: 81）：

（36） a. Aufstehen(, bitte)! (Aufforderung)
b. Den Reis langsam kochen! (Instruktion)
c. (Also,) Ruhig anrufen(, wenn ihr was braucht)! (Erlaubnis)

（37） (Ach,) Endlich Sedona besuchen (können)! (Wunsch)

文タイプとしては（36）の各文は命令文に，（37）は願望文である。両者の違いは Reis（2003: 188）に従うと（36a）は（36a’）に，（37）は（37’）のようにそれぞれパラフレーズすることができる：

（36a’）Steh auf!; Steht auf!; Stehen Sie auf! ; Man stehe auf!
（37’） Ach, wenn man/ich/wir endlich Sedona besuchen könnte(n)!

本稿の依拠する漫画資料では IHS 願望文は（38）の 1 例しか現れていない。（38）を対応する *wenn-* 定形後置願望文（39）と対比してみると前者には再帰代名詞が欠けていることがわかる：

（38） Nur einmal satt essen mit Reis! (D1, 8)
一度でええから米のメシ腹いっぱいくいたいのう (J.I, 8)

（39） Wenn ich mich nur einmal satt essen könnte! (D2.I, 137)
一度でええから腹いっぱいくってみたいのう (J.I, 127)

しかし IHS 願望文の再帰代名詞は（40）と（41）に見られるように必ずしも省略されるわけではなく，また（41）のように人称は必ずしも一人称形であるとはない：

（40） Mich/uns hinauslehen! (Fries 1983: 26)
（41） Ach, sich/mich endlich mal richtig ausschlafen können! (Gärtner 2014: 89)

IHS- 願望文が IHS- 命令文とどのような点で異なるか，IHS における再帰代名詞の生起に関する制約がどのようなものなのか，という問題には残念ながらこれ以上立ち入ることはできないが，文タイプの研究をさらに実り多いものとなるためには IHS は避けて通ることができない領域であることだけは言えよう。願望文の構造的意味は，接続詞の *wenn*，心態詞，焦点化詞，先行要素，定形の法，などの様々な特徴の相互作用によって生れるのであるが，IHS- 願望文は定形の義務性さえも否定するという点で新たな課題をつきつけているからである。

原典・翻訳

[Adolf I] Tezyuka, Osamu (2005): Adolf. Mord in Berlin. Aus dem Japanischen von T. Hasegawa u. a. übersetzt. Hamburg: Carlsen. (Adolf I, Seite)

[D1] Nakazawa, Keiji (1982): Barfuß durch Hiroshima. Eine Bildergeschichte gegen den Krieg. Aus dem Englischen und Japanischen von H. Kirchmann u. K. Yasui übersetzt. Reinbeck bei Hamburg: Rowohlt. (D1, Seite)

[D2] Nakazawa, Keiji (2004/2005): Barfuß durch Hiroshma. 4 Bde. Hamburg: Carlsen. (D2. Band, Seite)

[E] Nakazawa, Keiji (2004): Barefoot Gen. A Cartoon Story of Hiroshima. 10. Bde. Translated by Project Gen. San Francisco: Last Gasp of SF. (E. Band, Seite)

[J] 中沢啓治（2013）:『Hadashi no Gen. はだしのゲン』汐文社．全 10 巻．(J. Band, Seite)

参考文献

Altmann, H. (1993): Satzmodus. In: Jacobs et al (Hgg.), Syntax. Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung. Berlin: de Gruyter, 1006–1029.

Altmann, H./ S. Hahnemann (1999): Syntax fürs Examen. Studien- und Arbeitsbuch. Opladen/Wiesbaden: Westdeutscher Verlag.

Finkbeiner R. / J. Meibauer (Hgg.) (2016): Satztypen und Konstruktionen. Berlin/Boston: de Gruyter.

Flämig, W. (1964): Grundformen der Gliedfolge im deutschen Satz und ihre sprachlichen Funktionen. In: PBB (Halle) 64, 309–349.

Fries, N. (1983): Syntaktische und semantische Studien zum frei verwendeten Infinitiv und verwandten Erscheinungen im Deutschen. Tübingen: Niemeyer.

Gärtner, H-M. (2013): Infinite Hauptsatzstrukturen. In: Meibauer et al (Hgg.), 202–231.

Gärtner, H-M. (2014): Überlegungen zur versteckten Modalität infiniter Hauptsatzstrukturen. In: Linguistische Berichte 237, 81–92.

Grosz, P. G. (2013): Optativsatz. In: Meibauer et al (Hgg.),146–170.

前田満（2015）:「構文化としての脱従属化．If only 祈願文の事例を通じて」秋元実晴他（編）:『日英語の文法化と構文化』，107–145. ひつじ書房.

Meibauer, J. / M. Steinbach / H. Altmann (Hgg.) (2013): Satztypen des Deutschen. Berlin/Boston: de Gruyter.

Reis, M. (2003): On the Form and Interpretation of German *Wh*-Infinitives. In: Journal of Germanic Linguistics 15.2, 155–201.

Scholz, U. (1991): Wunschsätze im Deutschen – Formale und funktionale Beschreibung. Satztypen mit Verberst- und Verbletztstellung. Tübingen: Niemeyer.

Zifonun, G. et al (1997): Grammatik der deutschen Sprache. Bd. 1. Berlin / New York: de Gruyter.